

白門経友会

定期総会を終えて

毎年六月初旬に開催してきている白門経友会定期総会は今年で二十三回目となり、次のようなプログラムで実施し審議事項は滞りなく了承されました。

日時平成二十五年六月一日

(土)午後二時開会

場所中央大学多摩キャンパス

七号館七二〇三教室

プログラム

(一) 定期総会 午後二時～二時三十分

①平成二十四年度事業報告・決算報告

②平成二十五年度事業計画・予算案

③その他

(二) 記念講演会

「日本の名城」その見方、楽しみ方」

講師：片桐稔晴教授

総会では、松丸会長の開会挨拶に続き、風間幹事長より昨年度の事業報告・決算報告ならびに今年度の事業計画・事業予算について説明があり異議なく承認されました。

講演会では、片桐稔晴教授により日本の名城について、その構造、そのことの意味や社会的背景を、多数の画像を駆使して様々な視点から分かり易く解説していただきました。

講演会後は、例年同様に会場を「ふらっと」に移し懇親会を開催しました。齋藤顧問をはじめ大先輩から現役の教員、そしてゼミ学生など二十名が参加し、自己紹介等を通して活発な懇談の場とすることができました。今後ホームページなどを通して総会以外でも学生を含めた交流の場を増やす所存です。



会員各位におかれましてはご多忙とは存じますが、幹事会等へのご参加とともに一層のご協力をお願いする次第です。(副幹事長 佐藤文博)

八島先生を偲んで

経済学部教授 八島健司(やしまけんじ) 先生が、八月四日午後三時に逝去されました。享年七十歳。

八島先生にはお酒が進むと必ずされる話がありました。「酔っ払ったから言うんじゃないけど」という枕詞と共に始まるその話は、御茶ノ水のやり方ではなく多摩のやり方やらなくてはダメだという体育授業に対するご自身の持論でした。中大出身の八島先生も学生時代に御茶ノ水の体育を経験してこられたからこそその内容で、スポーツにとつてあまり相応しくない環境で、大人数を相手に、ともすれば単に授業を「熟す」だけというやり方は、多摩移転とともに脱却しなければいけないというものでした。

それは体育館やグラウンド、コートなどの教場の課題だけにとどまらず、授業に必要な補助的教材に関することであつたり、授業運営そのものについての考え方なども含み、学部や必修、選択の枠にとられずに、いかに充実した体育の授業を提供できるかをいつも考えておられた八島先生らしい話でした。亡くなる数週

間前にお見舞いに行った際にも、帰り際に、ある先生を呼び止め酸素吸入器をずらしながら辛うじて聞き取れるほどの声で「中大の体育を頼む」と託されるほどでした。また、八島先生は、中大生はあまり母校のチームの応援のためにスポーツの試合に足を運ばない、それは今の多摩の立地のせいではなく昔からそうなんだという話をされていました。早慶のように一般にも認知されるような、お互いをライバルと認め合う相手がいないという構図も、中大生にとつて、あまり応援に熱が入らない原因の一つとも捉えられます。しかし、八島先生にはスポーツを通して愛校心を育むという点は、中大にとつてはまだまだ伸び代があると映っていたのかも知れません。

目前に迫っていた定年を前に、授業に対する情熱、そして、中央大学を思う気持ちの強かった「中大体育人」八島先生のまだまだ語り足りない思いは、亡くなるという形で中大を去られた事によつて、我々にとつては言葉以上の重さで伝わっているようです。

ご冥福をお祈りいたします。

経済学部准教授

保健体育研究所 高村直成

キャリアデザインを通して

学んだこと(1)

経済学部二年 川田雄輝



キャリアとは英単語 "career"

から「経歴・職歴」という意味である。そのキャリアを一体どの様に形成していくのか、言い換えると自分の未来をどのようなデザイン "design"、「意匠・形態」に仕上げていくか。中央大学入学という夢を現実手に入れ、達成感に満ちた一年を過ごした。入学してから新しい環境、友達に恵まれ以前で体験が出来なかつたような満喫した大学生活を送っていたのである。反省と共に自分なりの大学生活の本業とは何か、を考えるようになった。高校時代に目指していた一つの夢というのは大学進学であった。その結果、私はこの大学に入学する事が出来て成功を得ることが出来たと感じている。高校時代にこの目標があったからこそ達成感を得られたと考え、私が大学二年生になった頃に二年後に決まる

であろう就職を目標として視野に入れたのである。そこで、就職や将来の人生の歩み方を鳥居伸好教授が教鞭を振るうキャリアデザインの講義で学ぼうと思った。

この授業の大きな魅力の一つは、毎回の授業で各界の一線で活躍されているゲスト講師の話伺える事である。社会経験の乏しい私にとつて大いに参考になることばかりであった。キャリアデザインの授業へお越し下さるのは各業界起業家、観光ジャーナリスト、不動産会社取締役、政府専用機担当、日本銀行役員など素晴らしい方々ばかり。一つ一つの社会での生の話を聞く事はとても刺激的であった。

鳥居伸好教授担当の「キャリアデザイン」のもう一つの魅力は、学生自らが自分の姿に照らし合わせて考える機会を持つということだ。鳥居教授の「10の心得」から始まった授業だが、特に「基本を大切に」「可能性思考」「あきらめない」というアドバイスはこれからの人生にいつも携えていきたい心得だ。「キャリアとは、偶然」や「運」に作られる側面を持つ「これはキャリアデザイン特別講師、株式会社パレイル取締役高田圭吾様の言葉で

ある。私はこの言葉に対し励まされたが、その一方で不安を感じた。「偶然」や「運」という事は肯定的な意味でも、否定的な内容としても受け取れるからである。しかし、その「偶然」や「運」を良い方向へ導く事が可能だと僕は考えた。ここで全てを運任せと考えるとうまくも否定的な意味と捉えてしまうかもしれないが、努力によって運を引き寄せることが出来るのでは無いかと思った。キャリアにおいては努力によって必ずしも理想的な経歴を得られるわけではない。全てを運に任せてしまう事は二分の一、それ以下の確率で失敗するかもしれない。しかし、キャリアの方向性を自分の中に持ち、理想を捉えその目標に向かって努力する事で道が開かれる確率は大きくなるであろう。高田圭吾様はこの言葉の後にこうとも述べた。「キャリアは直線的に作れるものではない」「やるべきことをしっかりやる人がうまくいく」「直線的に作れるものではない」というのは、目標に向かう段階で失敗もあるであろうが、やるべきことをしっかりやる人は最終的に良い結果を残す。という意味である。

することは、その方達のお話を伺うとなんと一人一人が過去に挫折を経験している事であった。事業失敗や職業選択に不都合や大学中途退学など華やかな人生を生まれてから送っているわけでは無いのである。しかし、各々の方々はその試練を肯定的に捉える事はなく、むしろ自分自身の生活のステップアップとして肯定的に捉える考えをお持ちであった。私自身も失敗を繰り返しながら自分をハードルとして越えられない部分もあり、否定的な意見を持つてしまふことももちろんあった。現在の日本経済は就職活動を含め、あまり良い状態とは言えない。しかし、キャリアデザイン特別講師陣の心強い信念を伺い、それを自分自身に吸収し、大学生活を含め、これからの社会生活、特に不安定である日本経済に対しての武器としていく。そして、未来に待ち構える困難や憂鬱な出来事をキャリアデザインで得た信念と共にハードルを飛び越えていけるようにしたいと思う。

キャリアデザイン講師陣に共通



キャリアデザインを通して

学んだこと(2)

経済学部二年 中原佳那恵



キャリアデザインの授業ではさまざまな職業の方々が毎週中央大学にお越しいただき、一時間三十分という限られた時間の中でご自身の生い立ちや経歴、今の職業に就くまでの過程を詳しくお話してくださいませ。自分の興味のある職種のお話はもちろん、いままで聞いたこともない職種の方の話まで聞くことができました。その中でも私は、日本銀行・田嶋治久氏の講義内容が一番興味深かったです。

まず初めに日本銀行とはなにか。日本銀行法とともに日本銀行の組織について説明していただきました。いままで私は日本銀行についての漠然としたイメージしかもっていませんでしたので、田嶋氏のお仕事内容を聞く前に日本銀行の存在定義について知ることができて良かったです。その定義とは一、日本銀行はわが

国唯一の「発券銀行」である。二、日本銀行券は法貨として無制限に通用できる。三、偽札を作ったり、日本銀行券の額面を書き換えたり、切ったりして変造した場合、罰せられる。偽札と知りながらそれを使用した場合も罰せられる。といったものです。日本銀行とは官公庁だと思われがちですが、実は法人会社であります。そのうちの約55%を政府が出費しています。

私が特に興味をもったのは、新しい経済政策についてです。日本銀行総裁が変わり、これからの日本の経済にも少なからず影響はできることと思います。長年つづく金融システムや決済システムについての知識を得て、経済効果について違った視点から見ることができました。また、特に印象深かったのは東日本大震災の時の日本銀行がとった対応についてです。私でしたら目の前にある問題を解消することばかりを考えたいですが、日本銀行は長期的にみた経済政策を行いました。それは例えば決済機能という短期的なものばかりではなく、景気下振れリスクへの対応や資金供給などといった長期的なものです。

他にも人材についてのお話もし

ていただきました。田嶋氏の考える日本銀行において必要とされる人材とは、一、パブリックな仕事に対して情熱と誇りを持てる人である。二、知的好奇心を持つとともに、他人の意見に耳を傾ける柔軟性、バランス感覚を持つ人である。三、新たな課題に対し、常に挑戦し続ける気概と必要な施策を成し遂げていく実行力を持つ人である。ということでした。もちろん、日本銀行で働くには専門的な知識も必要だと思いますが、それよりもまずは人としての成りが大事なのだとは強く感じました。挑戦、実行力、情熱ややる気といったものは全ての職種に対して必要なものではないかと思えます。田嶋氏のお仕事について興味をもったのはもちろんですが、日本国民であるからには知っておくべき日本銀行についての知識、また職業選びのポイントまでも知ることができて良かったです。

この授業で本当にさまざまな職種に触れることができました。この授業で学んだことはこれから進路を考える際にわたしにとつてとても役立つことと思えます。これらを踏まえ、今後の学習を進めていきたいと思えます。

～総会時の写真～



え、あの先生が

シリーズ⑭
経済学部教授 只腰 親和

今年度から着任しました只腰親和です。イギリスの経済思想史を専門にしています。昨年度までは横浜市立大学に約三十年間、勤めておりました。申すまでもなくすでに若いという年齢ではありませんが、研究教育を新たな環境でできることになり、新鮮な気持ちで日々を過ごさせているように思います。横浜からの通勤で、交通機関は東横線―南武線―小田急線と乗り継いでいますが、これまでほとんど利用することのなかった小田急線で通勤に便利な多摩急行を登戸から利用できるのを知ったこと、にもかかわらずこの急行がしばしば遅れたり、連休したりして時間に遅れないかと思いがけずひやひやすることがあるのは、私にとつて一種の新鮮な経験のひとつに数えられます。

前任校は横浜のもつとも南の金

沢八景に位置していて海のすぐそばでしたが、中央大学は多摩丘陵にあり、研究室から丹沢(?)の山並みをたえず眺めることができます。両大学とも個性ある立地で、期せずして好一對の二つの自然環境を体験できたことにひそかな喜びを感じています。

大学の内部の事柄についてはまだ一年も経過していないのでよくわかっていないことばかりですが、やはり前任校とはその規模の面で本学は対照的なのでその面で気づく点があります。学生数は横浜市立大学が一学年全体で七百人程度でしたが、本学は経済学部のみで一学年千人という数字から両大学の相違は想像がつくと思います。そのように規模の大きい本学の、私にとつてすでに実感している現段階でのメリットは図書館です。全体の蔵書数は本学の方が約二倍だと思えますが、とくに私の専門にとつては、同じような分野の先生の先生方が集めてくださった蔵書の恩恵をおおいに享受できるのではないかと期待しています。一八一―一九世紀イギリスの、経済を主とする諸思想を専門にしている私にとつて、本学が所蔵するヒューム・コレクションは、すこし誇張した、

かつ自分本位な表現を許していただければまるで自分のために用意されたもののようにさえ思えます。図書館は私の研究室がある二号館に隣接していることもあって、足を運ぶ機会はずでにこれまでの間けつして少なくない(勝手に)思いこんでいますし、これからも図書館の方々はお世話をおかけすることになると思います。

今後しばらくは、本学における仕事のうえで必要なことを学んでいくのが私にとつて緊要事だと思えますが、新任者にとつて必要な知識は存外、何か難しいことというよりも他の先生方には当たり前のことで自分は知らないといったいわば日常的事柄ではないかと思えます。諸先生方にご教示を仰ぐのは当然として、もうひとつの補助手段としてゼミの学生諸君からそういう知識を習おうかと思つていきます。前任校で私のゼミは、「アダム・スミスと酒のゼミ」という噂があったとか聞いています。確かにゼミの終了後にゼミ生を誘う機会が時にありました。本学においても公私を通じてゼミ生諸君と親しく語らいたいと思つていきます。

編集後記

昨年の福井教授に続いて、今年も現役教員の計報を掲載することとなりました。長年中央大学経済学部で体育教育に尽力されてこられた八島教授のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

さて、ようやく白門経友会のHPが開設され、会報も今回よりインターネット上で公開することになりました。これまでの会報に親しんでこられた皆さんにはご不便をおかけすることになりますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。本会は、経済学部OB、学生、教職員の連帯の場となることを目指して活動してきました。このHPを手がかりにその活動の輪をさらに広げるために、新しい情報発信を模索してまいります。皆さんのご支援、ご協力をお願いいたします。

(常任幹事 濱岡 剛)

2013 年 11 月 1 日 第 52 号

発行 白門経友会常任幹事会
 発行人 白門経友会編集委員会
 編集長 鈴木 秀男

〒 192-0393
 東京都八王子市東中野 742-1
 中央大学 経済学部内
 URL: www.wg-keiyukai.com
 FAX: 042-674-3425